

## 近代に活躍した大村の人々

## 凡例

- 一 本章は、近代に活躍した大村の人物二〇人について、その足跡などを収録した。
- 二 人物の選定基準は次の五項目のとおりである。
  - (一) 現在の大村市出身もしくは大村市にゆかりのある近代に活躍した人物。
  - (二) ある一定の分野での第一人者、もしくは創始者、草分け的存在として活躍した人物。
  - (三) 教育、社会、文化に貢献した人物。
  - (四) 郷土に貢献した人物。
  - (五) 本文中に登場し、別個に経歴と実績について説明を要する人物。
- 三 各人物の経歴や功績とは別に、その人物の発言や語録を適宜引用し、エピソードを記述した。新史料などがあれば紹介した。
- 四 本章の執筆要領は次の五項目のとおりである。
  - (一) 冒頭の人名の下に、西暦で生没年、肩書きを記述した。
  - (二) 構成は最初に履歴、その後エピソードを記述した。
  - (三) 各人物に応じて墓地の場所を履歴最後に記述した。
  - (四) 地名表記は当時の地名の後ろに( )を付し、県外は都道府県から、県内は市町村から、市内は町から、現在の地名を記述した。学校等の名称は、現在の名称を( )に記述した。
  - (五) 本文では註を付けず、すべて章末の参考文献の部分に記述した。
- 五 本章は、市史編さん室嘱託員(巻末掲載)が分担執筆した。



わたなべ

清

清（一八三五～一九〇四）

五教館出身、官僚、政治家



写真5-1 渡辺 清

（大村市立史料館所蔵）

天保六年（一八三五）大村藩士渡辺雄太夫武俊（巖）の長男として大村城下岩船（玖島二丁目）に生まれる。諱は武勝・清、通称は栄之進・範助・清左衛門、雅号を東山と称した。家禄四〇石。弟は昇で、石井筆子は娘である。清の先祖は戦国時代、大村純忠の家臣として三城七騎籠で活躍した渡辺伝弥九である。藩校五教館で学んだ。文久三年（一八六三）昇や楠本正隆らとともに勤王三十七士同盟を結成。元治元年（一八六四）五教館表頭取・硝石丘並製練方用掛・五教館監察。慶応二年（一八六六）藩士の二、三男から健康で強靱な者一四人を精選、「新精組」を設置し長に就任。翌年、「新精隊」へ改称し、若干隊員を入れ替え一五人とし隊長として京都へ出兵。上洛に際し乗艦したのは土佐藩軍艦の「夕顔丸」で、坂本龍馬が同乗していた。慶応四年（一八六八）戊辰戦争勃発後、桑名等で戦功を立て東海道先鋒総督の東征軍監・東征大総督下参謀として関東各地に転戦。江戸城無血開城談判に同席。更に奥羽追討総督参謀として偉功を立て、明治二年（一八六九）賞典禄四五〇石を永世下賜される。以後、徴士民部官権判事、更に民部権大丞兼三陸磐城両羽按察使判官に就任、戊辰戦争で荒廃した東北地方の復興に尽力。その後、民部大丞・巖原県権知事・大蔵大丞などを歴任。明治七年（一八七四）福岡県令に就任。県政に尽力し、秋月の乱等士族反乱の鎮圧に力を注いだ。明治十四年（一八八一）県令退任後、元老院議員。明治二十年（一八八七）男爵を叙爵。明治二十三年（一八九〇）貴族院議員に選出され死去するまで在任。明治二十四年（一八九一）併行して福島県知事に就任し、翌年退任。明治三十七年（一九〇四）没。享年七〇歳。青山霊園に葬られる。

弟の昇と坂本龍馬写真5-1-2は薩長同盟締結で深い関係を結んだが、清も龍馬と深いつながりがあった。それは慶応三年（一八六七）大村藩「新精隊」隊長として京都出兵後のことである。明治三十年（一八九七）四月の史談会京都支部

で清は、幕末の政治状況を回想している。史談会は、当時生存者から幕末維新期に関する証言を集め、史料として残そうと例会を随時開催し、招かれた談話者の体験を『史談会速記録』としてまとめ刊行した。清の談話はその第五十九輯に収録されている。慶応三年上洛後、清は龍馬と会談した。龍馬に対し、兵力が一番大事な現在、なぜ土佐藩は京都へ出兵しないのか、と問うた。薩摩藩を始め大村藩も出兵しているのに土佐藩が出兵しないのは当然の疑問であった。龍馬は「如何にも道理である。所が如何せん我土州の論と云ふものは、今日迄未だ決心して居らぬ。御恥ずかしい談であるけれども、何分内輪に混雑があつて、まだまだ薩州や貴藩の如き決心は無い、夫故却つて其様なものが上京せられては甚迷惑である。却つて邪魔になる訳だからドウカ左様思つて貰ひたい」と答えた。龍馬は未だ土佐藩の藩論が統一されない状況下で出兵しても他藩に迷惑をかけると思へる一方、薩摩藩と大村藩の出兵の決心を評価している。土佐藩は前藩主山内容堂（豊信）が一五代將軍徳川慶喜に同情しており、武力討幕に及び腰であった。

龍馬と清は会談後「其日は別れまして、其翌日例の如く薩州邸内に於て手兵を練つて居りましたが、俄然土州の才谷梅太郎は暗殺されたと云ふことを聞きました。私もあまり突然な風説に驚きまして、兎も角其の宿所を訪ひました所、独り才谷のみならず、石川も共に殺されて居りました。私も其時は落胆驚愕して嘆息をしました、併し如何とも仕方がないから、泣く泣く其死骸を撫で、帰つて、其れから十二月五日頃であつたか、窺かに西郷吉之助を訪ひました。」と回顧している。才谷梅太郎とは龍馬の変名で、石川とは龍馬の盟友、過去大村城下を訪問した中岡慎太郎である。清は龍馬が暗殺された慶応三年十一月十五日の前日に会談し、その現場にも駆け付けていた。前日に会った同志の友が翌日暗殺された光景を目の当たりにした清の胸中は揺れ動いていたに違ひなかった。



写真5-2 坂本龍馬  
(高知県立坂本龍馬記念館提供)



写真5-3 渡辺 昇  
(大村市立史料館所蔵)

天保九年（一八三八）大村藩士渡辺雄太夫武俊（巖）の次男として大村城下岩船に生まれる。諱は武常、通称は兵力、雅号を東民、其鳳と称した。家禄四〇石。兄は清で、石井筆子は姪である。幼少期から身体が大きく腕白だったという。友人から「お前は太田道灌（室町時代中期の武将で同時期の江戸城築城者）だとか源頼朝だ」と揶揄されると「おれは道灌じゃない、頼朝じゃない、牛若丸だ」と返したらしい。やがて藩校五教館で学び、また剣術修行にも励み神道無念流を修得した。安政七年（一八六〇）藩命で江戸に遊学し、神道無念流「練兵館」道場（館主・斎藤弥九郎）で桂小五郎（木戸孝允）ら長州藩士と剣術修行に励む。これが幕末の大村藩と長州藩が交わる源流となった。昇は練兵館の塾頭を務め、在任時には後に新撰組局長近藤勇とも交流する。また儒学を安井息軒に学んだ。文久三年（一八六三）藩主純熙の側近である二十騎馬副を拝命。また兄の清や楠本正隆らとともに勤王三十七士同盟を結成。薩長同盟締結に従事。明治四年（一八七一）盛岡県権知事、大阪府大参事等を歴任。明治十年（一八七七）大阪府知事。明治十七年（一八八四）会計検査院長に就任。その後、欧米を視察、会計検査制度の整備を進めた。明治二十年（一八八七）子爵を叙爵された。明治三十七年（一九〇四）貴族院議員に選出され、明治四十四年（一九一）まで在任。劍客としても全国に知られ、大日本武徳会の役員として、日本の剣道の発展に尽力、我が国初の剣道範士号を授与される。大正二年（一九一三）没。享年七十六歳。青山霊園に葬られる。

昇の業績の第一は幕末に薩長同盟を結実させたことである。長崎で坂本龍馬と会談し、龍馬は「大ニ志ヲ天下ニ伸張セント欲セハ、薩長必和セサルヘカラス」（渡辺昇自伝）と語り、同盟締結のため、昇に長州藩の周旋を依頼した。

龍馬は幕府に代わる政権は薩摩藩と長州藩であると見据えてはいたものの、当時、幕府に味方する薩摩藩と反幕府の長州藩との同盟は決して容易ではなく、長州藩と近い昇に白羽の矢を立てた。昇は桂小五郎と高杉晋作の間を何度も往復し薩摩藩との同盟を説得。慶応二年（一八六六）に同盟締結となった。同盟実現の背景には昇の思想がある。それは各藩が連合して事に当たる「一繩の策」であり、複数の物を一本の縄で結んで一つにする、つまり諸藩をまとめ一つの政治方向へ向かわせることを意味した。「渡辺昇自伝」には「一繩ハ各藩聯合ノ暗号」とある。桂小五郎は昇宛書状（慶応二年十二月二十八日付）で「一なわ之（の）御良策」九州一致之（の）御良策」と記し、御高説と評価した上で、行動をとともに起こした。一方で昇は薩摩藩士西郷吉之助（隆盛）らとも連絡を取り合っている。

業績の第二は、大阪府知事在任中に日本で二番目の幼稚園を設立したことである。しかもそれは日本初の保育料無料の幼稚園であった。昇が浦上四番崩れを処置した際、部下に関信三（一八四三―一八七九）がいた。関は愛知県（浄土真宗大谷派の僧侶で、本山の東本願寺からキリスト教信徒の探索を命じられ、長崎へ派遣される。その後維新政府の謀者（密偵）となり昇の部下として活動した後、洋行を経験し、明治八年（一八七五）末、幼稚園文献の翻訳を依頼され、幼稚園と関わる端緒となった。翌年、日本初の幼稚園、東京女子師範学校（お茶の水女子大学の前身）附属幼稚園（保育料有料）開設に尽力し、二年後に監事（園長）に任命された。この幼稚園開業式を迎えた頃、大阪府知事の昇が来園、関と応接室で懇談する。昇は帰阪後、幼稚園設立に動き、やがて保育料無料の大阪府立模範幼稚園（大阪教育大学附属幼稚園の前身）を開設した。園児数は四八人であった。当時、小学校は受益者負担の原則が貫かれ、貧しい保護者も授業料を負担した。そのため保育料無料の幼稚園の創設など思いもよらないことであった。昇は大阪府議会の反対を押し切って無料幼稚園を開設したが、開園四年後、知事退陣とともに府議



写真5-4 渡辺 昇

【註】 沼尻桂一郎（真亭達多）編『現今英名百首』30頁から。  
（福岡県福津市平和祈念戦史資料館設立準備室蔵）



会で幼稚園に費用を支出することは時期尚早であるとの理由から、廃園された。

なお、沼尻桂一郎（真亭逢多）が編輯した『現今 英名百首』の三〇頁写真5-4上段には、「昇君は長崎縣士族にて博學多才なり大坂府の知事を拝命してより府下の人民を深く恵ミ民権を専らにし裁判を聞て罪の黒白を知る事つねならぬ人なり公暇を得る時ハ洋書を研究し性質詞少なくて頗る英傑なりとそ」とあり、大阪府知事在任時の昇の性情を評価し、英傑とみなしている。同書は、明治十四年（一八八一）に出版され、明治政府の頭官から吉原の花魁まで、同時代である明治十年代初頭の著名人を幅広く取り上げ、その肖像・詠草・略伝を掲げた異種百人一種の一つである。



楠本くすもと

正隆まさたか

（一八三八～一九〇二）

五教館出身、官僚、政治家



写真5-5 楠本正隆

（大村市立史料館所蔵）

天保九年（一八三八）大村藩士楠本直右衛門正武の長男として大村城下岩船（玖島二丁目）に生まれる。諱は正良・正隆。字は小一郎、通称は平之丞・久太郎・勘四郎、雅号を西洲と称した。家禄六〇石。同じ年に渡辺昇や長与専斎が生まれている。嘉永二年（一八四九）藩主純熙の素読学問（御相手に命じられ、五教館に学び、表生となる。文久三年（一八六三）藩主純熙の側近である二十騎馬副を拝命。渡辺清・昇らとともに勤王三十七士同盟を結成。以後、勤王派として活動し、島原藩との交渉も務める。慶応四年（一八六八）明治新政府から徴士長崎裁判所権判事兼九州鎮撫使大佐に任じられる。明治三年（一八七〇）外務大丞、明治五年（一八七二）外務大丞を経て、同年新潟県令就任、県政に尽力。明治八年（一八七五）政府が地方官会議を東京で開催したとき監事を務めた。同年内務大丞に任命され、新潟県令退任後、東京府権知事を兼任。明治十年（一八七七）東京府政に専念し、東京府知事に就任し、道路改良・市区改正に尽力。明治十二年（一八七九）知事を

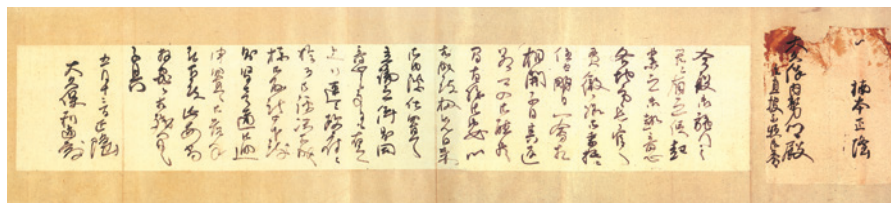


写真5-6 明治11年5月13日付 大久保利通宛楠本正隆書簡(国指定重要文化財「大久保利通関係資料」)(国立歴史民俗博物館所蔵)

退任し、元老院議員(後、副議長)就任。明治二十二年(一八八九)東京市会議員当選、東京市会議長を二度務める。明治二十三年(一八九〇)衆議院議員に当選、明治二十六年(一八九三)には衆議院副議長から議長となり、以後第三、五代の議長を務める。都新聞社主や社長も務めた。明治二十九年(一八九六)男爵を叙爵された。勲一等瑞宝章受章。同年、議員を辞職。明治三十五年(一九〇二)没。享年六五歳。谷中霊園に葬られる。

正隆の政治力は明治初年の長崎勤務時代に培われたと言える。長崎で長州藩出身の井上聞多(後の初代外務大臣井上馨)や後に内閣総理大臣となる薩摩藩出身の松方正義や佐賀藩出身の大隈重信とも交流を持ち、井上が正隆の実力を大久保利通へ伝えたことが中央政界進出の契機となった。大久保は正隆を新潟県令に任命。当時、新潟県には難問が山積しており、正隆はその期待に見事に応えた。難題であった信濃川治水工事の問題を解決し、役所の仕組みを整えた。更に県議会の開設や地租改正推進などに努め、第四国立銀行を設立した。大久保からは「天下随一の県令」と賞された。また同じ大村藩出身で庭園師の長岡安平を登用し完成させたのが日本初の都市公園、白山公園である。白山公園内には楠本の銅像が建立された。

明治十一年(一八七八)大久保利通は赤坂紀尾井坂で石川県士族島田一郎に暗殺されたが、その際、大久保が所持していた正隆の手紙写真5-6には大久保自身の血痕が付着した。今その手紙は国指定重要文化財「大久保利通関係資料」の一点として、国立歴史民俗博物館に所蔵されている。

「憲政の神」「議会政治の父」と称された政党政治家、尾崎行雄(号堂)は昭和九年(一九三四)に刊行した自著『近代快傑録』で「大隈伯、伊藤公の両大政治家に比し、人物の高下に

就いては、世間既に定論もあるだらうが、当時日本名物男の一人の中に數へられたのは、楠本正隆男(爵)であつた。此の人は維新時代から多少働いた人で、後に元老院議員、衆議院議長となり、政黨の首領として、吾々と一緒に大分働いたが、大層面白い人であつた。」と評価し、「楠本男(爵)は、イツも伊藤、大隈、自分の三人を以て、日本の三傑と自ら信じてをつた。又時々は言葉にも現はして、「己と伊藤と大隈の三人で約束したから、日本の事は、もう安心だ、心配なさらぬが宜しい」などと、吾々にも宣告する事もあつた。世間で思ふよりも、餘程自ら任ずる所が高かつた人である。」と記している。正隆は伊藤博文・大隈重信とともに日本の三傑と自称し、国政を自らの責任としていたことがうかがえる。尾崎は正隆と地方遊説を度々行っている。尾崎は正隆を「矢張一種の大なる人物であつた。當代の飾りとなるべき資格を有する一人であつた。不幸にして、餘り老境にも入らぬ内に、此の世を去られたのは甚だ遺憾である。」と回顧している。

正隆が明治三年(一八七〇)に建てた家は、現在も岩船に残っており、長崎県指定有形文化財「旧楠本家住宅」(旧楠本正隆屋敷)写真5-7として、貴重な武家屋敷の様式を残す建物の見学と正隆の功績を知ることのできる場所となっている。

 **長与** ながよ **専齋** せんさい (一八三八〜一九〇二) **五教館出身、医師・医学者**

天保九年(一八三八)、大村藩医の家に長男として生まれる。五教館で学んだ後に、大坂の適塾に入塾し、安政五年(一八五八)、福沢諭吉に代わって塾頭となる。万延元年(一八六〇)、大坂から戻り長崎の医学伝習所(後の精得館)でポンペから西洋医学を学ぶ。慶応二年(一八六六)、藩命により再び長崎に遊学、ボードウインに学ぶ。明治元



写真5-7 旧楠本家住宅(旧楠本正隆屋敷)〈長崎県指定有形文化財〉  
(大村市教育委員会提供)





写真5-8 長と専齋

(大村市立史料館所蔵)

年(一八六八)、精得館(後の長崎医学学校)頭取に就任。明治四年(一八七二)上京。岩倉使節団に随行し、アメリカ・ヨーロッパの医学教育・医師制度を視察する。帰国後、文部省医務局長に就任。明治七年(一八七四)、「医制七十六条を草案し、「医制」を公布する。東京医学学校(現在の東京大学医学部)の校長に命じられ、兼務。明治八年(一八七五)、内務省衛生局初代局長に就任。明治二十四年(一八九二)まで務め、日本の衛生行政の基礎を築く。その後、元老院議員、貴族院議員、宮中顧問官、中央衛生会長などを歴任する。明治三十五年(一九〇二)没。

専齋は、医制の制定の他、医師・薬舗の開業試験制度の発足、防疫・検疫制度の導入、東京司薬場(現在の国立医薬品食品衛生研究所)・牛痘種継所の創設等に尽力し、衛生行政の立上げに大きな功績を残した。また、明治十六年(一八八三)には、大日本私立衛生会を設立し、衛生思想の普及にも努めている。

専齋の人生を大きく変えたのは、岩倉使節団派遣時に見たアメリカ・ヨーロッパの先進的な健康保護の在り方であった。視察中、「サニタリー」や「ヘルス」という語を耳にし、特にベルリンでは「ゲズンドハイツプレーゲ」の語が何度か問答の時に飛び交った。調査をするうちに「健康保護」という字義の意味だけではなく、流行病の予防、貧困層への救済、土地の清潔、上下水の流用の禁止、市街家屋の建築方式の管理、薬品染料や飲食物の使い捨ての取締に至るまで、人間が生活する上で利害につながるものすべてを網羅した行政組織の存在を指し、どの国においても重要な機関となっていることに気づいたという。

この大きな「発見」をした専齋は、全く新しい事業が日本に必要となるのを自覚した。オランダの衛生事業を中心に学び、明治六年(一八七三)帰国。医務局長として健康保護を目的とする行政の組織づくりを始める。アジア諸国にはないこの新しい概念と組織を日本に浸透させるに当たり、専齋は英語のHygieneの訳語として日本で初めて「衛

生」という語を採用した。出典は『莊子』の「庚桑楚編」による。

しかし、そもそも日本に国家公衆といった観念はなく、国民健康の保護というものの普及の方法を探そうにも旧例すらなかった。また当時の日本の開業医の内、約八割は漢方医であった。一方で、西洋のものというだけで忌み嫌う者や明治政府への反抗の念すら抱く者も少なくない状況の中、衛生行政の先行きは、決して明るいものではなかった。

しかし、専齋は「寧ろ習俗事情に拘わることなく真一文字に文明の制度に則りてこれを定め先づ帰着する所あるを天下に示し而して施行の實際の如きは急がす迫らす多少の餘地を與へてその成功を永遠に期することとすべし」と、決して急がす焦らず、この一大事業が後世必ず成し遂げられることを信じ、まず医学教育の規定の整備に着手した。それが後に公布される医制である。

また視察で専齋が持ち帰り、民衆の健康促進と公衆衛生意識の向上のために提唱したことに海水浴がある。日本における海水浴の提唱者には他に松本良順がいるが、視察時に専齋はイギリスのブライトンで、近代海水浴提唱者であるリチャード・ラッセルからその効果について説明を受ける機会に恵まれた。明治十四年（一八八一）に『内務省衛生局雑誌』六月三十四号の特集で「海水浴説」を掲載し、日本で初めて海水浴を公に取り上げた。日本では病氣治療のため潮湯治が行われている地域もあったが、海水浴の効果については実証されていなかったため、まずは海水浴場の設立を進め、伊勢二見浦（三重県伊勢市二見町）と鎌倉由比ヶ浜（神奈川県鎌倉市）に開設した。「海水浴説」では、海水の生理的、医療的な効能を説き、海水を浴びることの効果を説いている。更に海水浴場の開設に適した場所、海水浴の手順・方法、海水浴をするに当たっての一日の過ごし方、その日の食べ物に関してまで詳しくまとめられている。その内には、海水浴の心得として、現在の私達に受け継がれているものもある。



写真5-9 長与専齋の旧宅（大村市指定史跡）  
（大村市教育委員会提供）

専齋は制度だけではなく、日本の民衆の衛生向上のため、「真一文字に」の言葉どおりに力を注いだ医師であった。適塾以来の親友である福沢諭吉は専齋を評して「日本国の医を医する医なり」という言葉を残している。大村市内には、専齋がアメリカ・ヨーロッパの視察後に立ち寄った旧家（宜雨宜晴亭）の一部が国立病院機構長崎医療センター内に移築され、市指定史跡となっている。

 **長岡** ながおか  
**安平** やすひ（一八四二〜一九二五） **造園家**



写真5-10 長岡安平  
（公益財団法人東京都公園協会蔵）

天保十三年（一八四二）、彼杵村（東彼杵郡東彼杵町）の大村藩士長岡安右衛門の家に生まれる。幼少期から病気がちで学問や武術を好まず、草木・小鳥の飼育に強い興味を持った。造園について独学で学び、明治五年（一八七二）、楠本正隆が新潟県令の時に日本初の都市公園である白山公園の建設に関与する。明治十一年（一八七八）、東京府公園係の技術者として採用される。明治二十九年（一八九六）、秋田県秋田市の千秋公園せんしゅうの設計を手がける。千秋公園は全国的に評判になり、安平には各地から設計依頼が殺到する。大正十四年（一九二五）没。生涯で公園四一件、庭園二五件の設計・建設に携わった。その他、史跡、名勝、天然記念物の保存、街路樹苗木の育成にも功績を残している。安平の才能を見出した楠本正隆との出会いは不明であるが、明治十一年（一八七八）の「第三大区一小區水帳扱所」には「地主長崎縣士族楠本正隆」の記名の横に「執事長岡安平」と確認でき、東京府公園係に任命された時は、楠本正隆と同居していた可能性もあり、親密な関係をうかがわせる。

安平に関する史料は少ないが、唯一著した遺稿集や当時の新聞記事から安平の公園・庭園に対する理念を知ることができる。安平は「庭園は人間の幸福と健康のために欠かせないものである」と考え、自然を愛し求めることは「人間

の共通性」ととらえていた。そのため、自然から離れて都会で暮らす人々にとって公園は不可欠なものであり、必要性を強く感じていた。事実、明治初期に設立された公園は外国人専用のものであり、皆が自由に自然を楽しむような庭園はなかったといえる。一般の人々や自由に遊ぶことができる広場を持たない都市の子どもたちのために、安平は公園内に「自然の縮図」を再現しようと手を尽くした。園内の案内板は場所に応じて自然に溶け込むように各場所でも形を変え、ベンチや東屋は園内で最も景色が良いところを選んで設置するなど、来園者を楽しませる工夫をしている。

また、近代化の一環で西洋式の公園・庭園が設置される中、「自然の景趣を主とする公園においては技巧に陥らんよりは寧ろ粗野に過ぐるを可とす。世間往々公園当事者にして庭園術に多大の興味を持つあまり、山間幽邃の地に小規模なる庭園的技巧を擅にせしものあり。これらは識者の鑿鑿を招くに至るものとす」と語り、自然の地形を活かし、人為的な技巧を最小限に留めることを重視した。園内の水は在来の滝や川から天然の水を引き、土地ごとの景観や自然と調和する設計を心掛けていく。そうした安平の姿勢は都市計画や環境保全の視点からみると現代性を持つとも評されている。

明治十七年（一八八四）、安平は大村公園に千本の桜を植え付け、後に県内や県外から多くの人が花見に訪れるほど評判となった。その評判を聞いた安平は「寄付した甲斐があった」と述べ、大変喜んだという。



福田

寅作

(一八四六～一九〇九)

松原村初代戸長、村長

弘化三年（一八四六）、松原村（松原本町）大村藩士福田順太夫の家に生まれる。明治維新では、官軍先鋒として江



写真5-11 大村公園



写真5-12 福田寅作 (個人蔵)

産の保護、道路改修、土手や溝渠こうきの整備、荒廢地の開墾、廢絶の危機に瀕していた松原鎌生産への投資、農業の改良を目的とした農談会の結成など社会資本整備や産業振興に功績を残した。

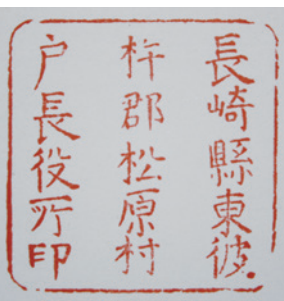
寅作履歷書の「事跡上申」には、「本村は藩政時代から大村彼杵間の中継地で、警察の手が行き届きにくいことから、不良の輩が多く集い、治安が良くなかった。その影響で村民にも職に就かず、税金を納めない者も多くいた。」と記されている。寅作はまず集落毎に布告会を設け、衛生、教育、殖産などについて分かりやすく説明し、それまでの悪い習慣をなくす理解を得ることに力を注いだ。当初、反発する者が多かったが、村民も次第に寅作の話聞き入れ、家業に一生懸命に取り組み、村のために道路改修費を寄付するようになった。松原村は明治七年(一八七四)以降、租税滞納者を一人も出さない東彼杵郡内の模範村へと発展した。寅作の村民を信じる思いと粘り強い対話が、村を変えたのである。

戸から奥羽に転戦。明治五年(一八七二)、松原村里正兼戸長となる。明治八年(一八七五)、松原小学校世話係を兼務し、後に松原学区学務員を務める。明治十一年(一八七八)松原村戸長に選出され、明治二十五年(一八九二)には同村長に就任。明治二十九年(一八九六)、村長辞任。県議會議員、郡議會議員、村議會議員、県郡村農村会役員等の公職を歴任。明治四十二年(一九〇九)没。

寅作は松原村の戸長、村長として近代化に大きく貢献した人物である。村有財



写真5-13 松原村戸長役所印



(個人蔵)



特に松原小学校設立と教育の普及に關しての功績は大きい。明治五年教育令の發布で福重松原共同の小学校が福重村に設立されたが、松原村からの就学はごく僅かであった。学校が遠隔地で通学に不便であり、また父兄の教育への理解も少なかったためである。寅作は松原村に小学校を新設するため、従来の村役場を小学校に当て、自宅の一部に村役場を移設した。明治七年に松原小学校が創設され、四〇名の生徒が就学した。入学者数は年々増加し、明治二十八年（一八九五）には一二名の生徒が就学するまでになった。生徒数の増加によって運動場が狭少となった際は、寅作の畑地を当て三三〇坪余りの拡張を実現している。明治四十二年（一九〇九）には学校基本財産として金一〇〇〇円を寄付し、校内には現在もその功績を称える石碑が建っている。

寅作の「鉄道に係る日誌」から明治三十一年（一八九八）には土地買収や地元からの要望を鉄道技師等に仲介し、鉄道敷設にも尽力したことがわかる。寅作の子孫に当たる松原の福田家には、朝永三十郎、福田雅太郎、横山寅一郎などと交わした書簡が残され、貴重な史料であることから、現在は市立史料館に収蔵されている。



熊野くまの

雄七おしち

（一八五二〜一九二二）

### 五教館出身、教育者、大学経営者

嘉永五年（一八五二）、大村藩士で漢学者である熊野与の息子として生まれる。万延元年（一八六〇）、五教館で学ぶ。慶応四年（一八六八）、戊辰戦争に大村藩兵として参加。同年大村に戻り、五教館に復学。明治三年（一八七〇）、藩命で留学生として上京し、安井息軒の塾で漢学を学ぶ。明治四年（一八七二）、東京で欧米の新知識に触れ、英語への向学心を燃やし、友人と慶應義塾（現在の学校法人慶應義塾）に入学。同年末には、外国人の英語指導を直接受けるために横浜に移り、ピアソン女史の下で学ぶ。後に日本婦女英学校でピアソン女史の助手を務める。明治六年（一



写真5-14 熊野雄七

（明治学院歴史資料館提供）

八七三)、ブラウン塾に学ぶ。明治八年(一八七五)、大村に戻り、両親を連れて横浜に転居。明治九年(一八七六)十一月(一八七八)、東京府に勤務。同時期に日本婦女英学校が雄七の命名で「共立女学校」に改称される。辞職後は共立女学校(現在の横浜共立学園中学校・高等学校)に復職する。明治十九年(一八八六)、明治学院が設立され、理事に就任。明治二十六年(一八九三)、共立女学校を退職し、明治学院幹事に就任。高等学部長、普通学部長などを歴任し、第二代総理井深樞之助(旧会津藩士)を支えた。大正八年(一九一九)、同学院を辞職。大正十年(一九二二)没。雄七は明治初期にアメリカ人宣教師・ジェームズ・ハミルトン・バラから洗礼を受けたクリスチャンであり、ミッション・スクールを始めとするキリスト教系の学校・教育施設で活躍した教育者である。クリシタン取締が特に厳しかった大村藩でそれに携わった者を先祖に持つ雄七が信仰に至ったのはなぜか。

それは慶応義塾でキリスト教にも新教(プロテスタント)と旧教(ローマカトリック)の違いがあり、イギリスが大きく発展している理由が新教を根本にした国民道徳にあると学んだことがきっかけであった。そして、先祖が取り縮まったのは旧教であることを知り、大きな救いを感じたと後に語っている。その上でも藩を裏切る行為にはしなないと悩んだ末に洗礼を受けたという。受洗を聞いた渡辺昇は、在京の楠本正隆に相談し、楠本邸で「君は邪教を信ずるとのことであるが、それは真実であるか」と詰問した。雄七は、信仰を素直に認め、在京の大村出身者たちから棄教を迫られたが、屈することはなかった。当時の藩出身者の結束もさることながら、雄七の信仰心の強さがうかがえる。横浜転居の際には、親族以外に藩内の前途有望な少年を同行させ、後に日本を代表する通訳者の一人となる石本三十郎や実業家として三菱関連会社の役員を務めた荘清次郎といった後進の育成に貢献している。

教育者としての雄七は、共立女学校で英語の訳読と漢学を受け持ち、明治学院



写真5-15 明治二十年(一八八七)に建築された学生寄宿舎(ヘボン館)

(明治学院歴史資料館提供)

では井深梶之助が海外出張する際に理事として代理を務めた。

雄七が幹事に就任した時、明治学院は学生数の減少と経営難に直面していた。更に明治三十二年（一八九九）文部省訓令で宗教教育の続行が不可能となり、文部省当局との交渉が難行する中、学生数はますます衰微の一途を辿った。雄七は当時辞任を決意するほどの苦闘の連続であったと語っている。後に他中学校と同様の特権を回復することができたのは、雄七を始めとする学院関係者の不断の努力の結果に他ならない。

雄七は、授業時は厳格であったが人情家で優しく、生徒の気持ちをよく理解する先生であったという。寄宿舎巡視の際は学生とよく語り、正月には必ず寄宿生を自宅に集めてかるた会を開催した。学院に来てから二人の子を亡くす不幸にも見舞われたが、自ら学院内に暮らし、常に学院と共にあった。雄七が退職する際に、学院は恩給以外に生涯毎月五〇円の手当を決定し、同窓生が募金で葉山に家を贈ったことから、功績の大きさと雄七への敬慕の念の強さがうかがえる。



いしづせ  
一瀬

ゆうしろう  
勇三郎

（一八五四～一九三〇）

五教館出身、控訴院長（現在の高等裁判所長官）



写真5-16

一瀬勇三郎

（長崎県立大村高等学校提供）

安政元年（一八五四）、大村藩士二瀬喜多右衛門達徳の次男として今の武部町に生まれる。万延元年（一八六〇）、藩校五教館に入学。明治三年（一八七〇）、大村藩貢進生として上京、大学南校に入学。明治八年（一八七五）、司法省明法寮（東京大学法学部の前身）へ転入。明治九年（一八七六）、司法省へ出仕。明治十六年（一八八三）、判事に就任。明治十九年（一八八六）、在官のまま自費でドイツ・ベルリンに向かう。始審裁判所判事に就任。明治二十三年（一八九〇）、欧州滞在四年にして帰国。八月検事に就任後、長崎始審裁判所詰、長崎地方裁判所検事正に就任。明治二十

六年（一八九三）、横浜地方裁判所検事正に就任。明治二十七年（一八九四）、大阪地方裁判所検事正に就任。明治三十二年（一八九九）、広島控訴院検事長に就任。明治三十四年（一九〇一）、広島控訴院長に就任。明治四十年（一九〇七）、函館控訴院長に就任。大正二年（一九一三）、法律第七号により休職を命じられ、東京で隠棲する。昭和二年（一九二七）、郷里大村に隠棲。昭和七年（一九三二）没。

勇三郎は司法省に出仕し、司法省法学校速成（司法官養成）科第一期生の商法・フランス民法講義でボワソナードの通訳を務めた。当時辞書がないために通訳ができない者が多い中、勇三郎は流暢かつ初めて法律を学ぶ者でもよく理解できる通訳をする異色の通訳官であった。また、下級司法官が薄給のために職を去る者が多いと聞いた際には、自らが年俸中毎年一千円を献納するので、増給を求めるとする願書を司法大臣に提出した。司法官の待遇改善にも力を尽くした。

勇三郎は逸話の多い人物である。大阪地方裁判所時代には、一日置きに登庁時間の二時間前に部下を集め、法律の講習会を開いた。そして執務時間が始まると椅子にも座らないまま、膨大な記録を一心不乱に読んだという。また、検事局の受付件数が九〇〇〇件に達していた時でも、各事件の詳細を記憶しており、同僚検事を驚かせたとも伝わる。広島控訴院検事長時代は、官尊民卑という風潮が強い中、検事と対等な立場ではなかった弁護士への待遇を憂慮した。そして、検事が敬遠しがちであった弁論に傾聴すべきであると主張したのである。その他、裁判所の証言台で言葉が出ない老婆には、そばに座り話しかけ緊張を解いたり、市民の声を拾うため裁判所内に警鐘箱を設置した。そうした民衆の側に立つ控訴院長に広島市民は感激し、勇三郎は多くの人々から慕われた。離任の際は、見送りに市長、警察、学校、軍医、弁護士、県・市議会議



写真5-17 勇三郎直筆の記名

（個人蔵）

長の他、各種の婦人団体などかつてないほどの人々が結集し、別れを惜しんだことが当時の新聞でも報じられている。

大審院の判決にも随従することなく、被告の心をもつて裁判せよと主張する勇三郎は、「法曹界の乃木將軍」と称された。勇三郎は、「誠」という字はどうしても忘れてはいけない。誠の心があれば、何をしても人に恥じる事はない。たとえ自分一人であっても、誠の道に合うようにしなくてはいい」と語り、その言葉どおり誠を貫き通した司法官であった。

大村に隠棲してからは、かつて五教館で教えを受けた松林飯山の記念碑の建設に私財を投じて奔走し、昭和七年（一九三二）に実現した。玖島二丁目の「松林飯山遭難之跡」碑は勇三郎が揮毫したものである。また、市内の勇三郎の母の実家である渡邊家には乃木將軍を敬愛した勇三郎の愛読書など貴重な品々が残されている。

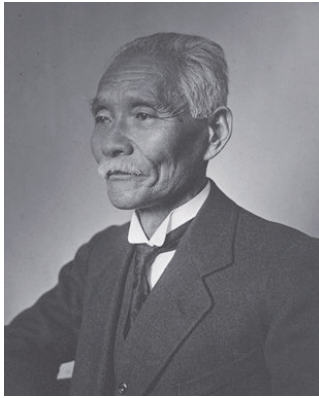


写真5-19 南 鷹次郎  
(北海道大学附属図書館所蔵)

南 鷹次郎（一八五九〜一九三二）

### 五教館出身、農学博士

安政六年（一八五九）東彼杵町大音琴郷で南仁兵衛の二男として生まれる。明治元年（一八六八）、藩校五教館ごうきょうかんに入学。その後、廣運館こううんかん（後の長崎外国語学校）で学ぶ。明治七年（一八七四）、周囲の反対を押し切り、向学心に燃える友人と上京。工部大学校に入学後、明治十年（一八七七）、札幌農学校の生徒募集の話に魅力を感じ転学する。同時期に転学した者の中には、内村鑑三、宮部金吾、新渡戸稲造がいた。明治十四年（一八八一）、札幌農学校（後の北海道大学）を卒業後、同校助教教授に就任。後



写真5-18 勇三郎の蔵書類（個人蔵）



に農場長となる。明治二十二年（一八八九）、同校教授に昇任。明治三十二年（二八九九）、佐藤昌介、新渡戸稲造とともに農学博士の学位を授与される。大正八年（一九一九）、北海道帝国大学教授に就任。初代農学部長となる。昭和二年（一九二七）、同大学を退官し、名誉教授となる。昭和五年（一九三〇）、北海道帝国大学第二代総長に就任。昭和十一年（一九三六）没。

大学の職責の他に北海道農業会等で幹事や顧問を務め、農業普及・指導に貢献した。また北海道所産の作物はその源を附属農場に発するものが多く、北海道農業の歴史上、その担った役割は大きい。鷹次郎は農場長を三二年間務め、北海道に適した作物の改良と普及のために大麦、トマト、ジャガイモ、玉葱、林檎、茄子、亜麻等の試験を行っている。中でも当時北海道では「不向き」とされた稲について先駆的な研究と試験を行い、その技術の普及、指導に大きな業績を残した。

一方で、鷹次郎は農業の研究者や各分野の創始者といった人材を育成した教育者でもある。鷹次郎が最初に札幌農学校の教壇に立ったのは明治二十年（一八八七）であり、作物学全般を担当した。当時は教授が少なく専門を修した者がいなかったため、鷹次郎は激務の中、教えるの中から専門の学科を担当できる研究者を養成することにも力を注いだ。事実、食用作物学、園芸学、工芸作物学、育種学、農芸物理学の各講座を担当する教授が門下生の中から誕生した。他にも世界で初めて搾乳機の実用化に成功し、経営の効率化に功績を残した酪農研究家・宮脇富、近代日本昆虫学の創始者・松村松年といった幅広い分野の創始者も輩出している。こうした人材の育成にも熱心であった鷹次郎の功績を称えて、人々は「北海道の太陽」「北海道農業の父」と呼んだ。



写真5-20 南教授牧草記載実験之景（1910年）  
（北海道大学文学文書館所蔵）

鷹次郎はどういう教育者であったのか。教え子によれば講義は明快で、教え方は具体的かつ実地的であり、試験問題にも実物をもってなすことが多かったという。北海道大学北方資料室には牧草を机上にのせ、講義をする写真も残されている。また農場長も兼務する鷹次郎は農場から直接教室に駆けつけることが多く、教室に入るなり左手で額の汗を拭いながら、右手で白墨を握ってすぐさま講義を始めていた。その熱心な姿に、授業開始の合図から五分間内に先生が来ないと教室を出ていくような生徒たちでさえ、何分遅れようとも誰一人として教室を出ようとするものはなかったといわれている。

北海道大学には鷹次郎直筆の書額が残されている。鷹次郎の総長時代、つまり晩年に著した書である。「自彊不息」「智徳併進」の二点で「自彊不息」とは、易経にある「自分からすすんでつとめ、励んで怠らない」との意味である。「智徳併進」の出典は不明であるが、「知識の獲得と同時に人間としての徳を重んじよ」と解されるという。鷹次郎が残している史料は少なく、この書は北海道の農業とその教育にかけた鷹次郎自身の信念を今に伝えている。後者の書には、雅号が「北農」と記されている。



横山

寅一郎

(一八六〇～一九三三)

五教館出身、政治家

万延元年(一八六〇)に大村藩士横山雄左衛門の次男として下久原に生まれる。五教館

に学ぶ。明治十四年(一八八一)、兵庫県警警部補となった後長崎に転勤。明治十七年(一

八八四)に退職し、私立大村中学校の設立に尽力する。明治十八年(一八八五)に県議会議員に当選。明治二十八年(一

八九五)、第二代長崎市長に就任し、三期一二年務める。明治三十七年(一九〇四)、衆議院議員に当選し、以後四回

当選を果たし議員生活は一五年間にわたった。大正十二年(一九二三)、長崎師範学校(現在の長崎大学教育学部)の

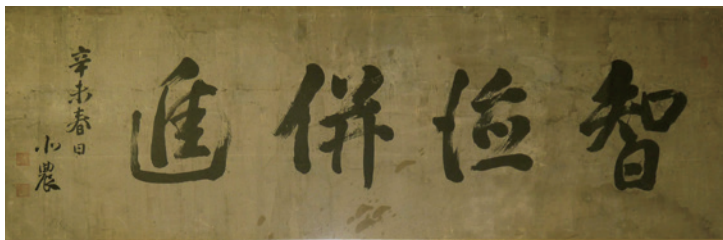


写真5-21 鷹次郎直筆書額「智徳併進」

(恵忠寮同窓会所蔵)



写真5-22 横山寅一郎  
(大村市立史料館所蔵)

大村市移転に貢献した。同年没。大村湾の真珠養殖にも取り組み、産業の育成と発展に功績を残す。墓は玖島中学校前の墓地にある。

寅一郎が当初から加わった私立大村中学校の設立運動は、明治十七年（一八八四）の県立初等大村中学校の廃止に端を発する。廃止を危惧した旧藩士たちは、その前年から私立中学校設置の声を挙げ、旧藩主家大村純雄の賛同を得て援助の約束を取り付けていた。その後も旧城下町では有志を中心に、施設や教員の確保や募金等の活動が行われた結果、廃止から僅か約一年内に私立大村中学校は設立されたのである。寅一郎は、寄宿舎取締を務めた後に校主総代（校長）に選出され、学校運営に携わった。

政治家として注目すべき実績は、第二代長崎市長時代の長崎市の水道増設、港湾改良、市域拡張の三大事業である。財政難の中、事業は当初の予定を超える経費と時間を要し、何より反対意見も多かった。そのうち明治十年（一八七七）に一度実施されていた長崎港湾改良事業は、長崎港の貿易挽回を望む市民の期待も大きく、大型船舶が直接着岸できる岸壁の造成と沿岸の埋立地を市街地として活用する構想で進められ、明治三十七年（一九〇四）に完成した。長崎市旭町一帯には完成を祝して桜が植えられ、寅一郎の功績を称えて「横山桜」と呼ばれた。後に桜の名所となるが、現在は「横山桜」の石碑が残るのみである。明治四十年（一九〇七）の市議会では、横山前市長に六万円円の退職慰労金を贈与する提案が可決された。寅一郎の功績に報いるため相当の巨額を贈るべきであるとの意見が多かったという。

寅一郎はどのような政治家であったのか。県議会議員時代の明治二



写真5-23 横山桜石碑（長崎市旭町3番地）

十年（一八八七）議会の記録が残っている。長崎県尋常師範学校建設費問題について激論が交わされ、多数の議員が退場する事態に際し、寅一郎は「斯くの如き重要議案の審議を控へ議場の不整理を来せし事県下七十万の県民並に傍聴者諸君に対しても申訳なき事なり、（中略）、議員が此議場にあるは一己の私用に非ず場合によりて県下人民の為身を供すべきの覚悟なり」と議場で発言している。また亡くなる前年の大正十一年（一九二二）に知人に宛てた手紙には「公共の利益に私財も顧みず尽くすことは、国家のためにもなるが、郷里の人々の心を良い方へ教え導き、奮い立たせる上で大きな効果を与えるのは間違いない」と述べている。

寅一郎は、郷土のため、そこで暮らす人々のために身を惜しまず働く覚悟を持ち、公共の利益に尽くす一人を増やすことがより良い社会の構築につながると信じた政治家であった。



**石井 筆子**（一八六一〜一九四四）

**教育者・瀧乃川学園第二代学園長**



写真5-25 石井筆子  
（大村市立史料館所蔵）

文久元年（一八六一）、大村藩士渡辺清の長女として岩船に生まれる。

明治五年（一八七二）、上京し、当時国立の女学校としては全国唯一の東京女学校（お茶の水女子大学附属中学校・高等学校の前身）に入学。明治十三年（一八八〇）、オランダ公使の従者としてオランダ、フランスに留学し、二年後に帰国。明治十七年（一八八四）、大村出身の官吏・小鹿島果と結婚。明治十八年（一八八五）、華族学校（女子学習院の前身）のフランス語教師となる。同僚の英語教師には、津田梅子がいる。明治三十一年（一八九八）、アメリカのデンバーで開催された婦人倶楽部万国博覧会

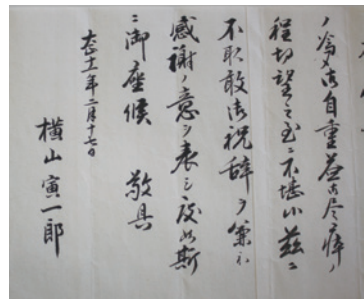


写真5-24 横山寅一郎直筆書簡（個人蔵）

に日本代表として参加。各地の教育、福祉施設を視察する。明治三十六年（一九〇三）、石井亮一と再婚。日本で最初の知的障害児と障害者の施設である瀧乃川学園の事に亮一と共に取り組む。昭和十二年（一九三七）、亮一死去後は、第二代園長に就任。昭和十九年（一九四四）没。墓は、多磨霊園にある。

筆子は、明治二十年（一八八七）「大日本婦人教育会」を結成し、婦人教育の普及、女性の自立と自覚を促す活動、校長に就任した静修女学校で貧しい家庭の女性への職業教育、孤女院の特別資金募集など、女子教育の普及と女性の権利の向上に幅広く貢献した。またキリスト教精神に基づいた日本で最初の知的障害児のための施設・瀧乃川学園の創設後は各方面に経済的支援を呼びかけ、津田梅子や貞明皇后（大正天皇の皇后）から協力を得て学園を支えた。保母養成部では英語、歴史、習字、裁縫などを教え、保育士教育にも尽力している。学園の火事で片足を痛め、半身不随の身となった後も第二代学園長を務めた。

筆子は留学で身に付けた国際感覚と優れた語学力を持ち、子育ての傍ら教壇に立つ職業婦人であった。そうした女性は当時珍しく、活躍の場は多岐にわたっていた。しかし、夫・果が亡くなり、それまでの活動を中途で断念せざるを得なくなった。残された子どもと共に生きる道を模索した筆子とはどんな女性だったのか。

明治四十三年（一九一〇）に筆子が認めた『学園のまとも』には、学園の事業内容と共に教育現場の様子がまとめられている。どんなに障害を持ち暴れていた子どもでも、繰り返し教えることで次第に伝わり、おとなしくなるという教育のやりがい、空に浮かぶ月を取ってとせがむ子どもにも別の少年がたらいを満水にして与え、喜び合う光景にある自然と人間本来が持



写真5-26 石井亮一と筆子  
(社会福祉法人瀧乃川学園石井亮一・筆子記念館所蔵)



つ美しさ、精神的な豊かさ、それによって受けた感動などが綴られ、筆子の学園での日々がうかがい知れる。学園は財政難を抱え、経営危機にも見舞われたが、日常の中に多くの喜びを見出しているのがわかる。来日中交流を持ち、後にデンマークで婦人参政権結社を立ち上げるヨハンネ・ミュンターは、筆子に感銘を受けた一人である。明治四十三年（一九一〇）の筆子宛書簡では、出会った頃より今のほうがずっと幸福そうだと記している。困難の中でより生き生きと教育に取り組む筆子に周囲の人々も目を見張っていたことがうかがえる。

大村市内には静修女学校で学んだ教え子宛ての直筆書簡が残されている。養蚕に精を出す中、疲労から倒れてしまい「年は取りたくない」と皆で笑ったという話や自身が丹毒（化膿性炎症）になった時には、主治医や看護師が泊まり込み、皆に迷惑をかけたことなどが包み隠さず記されている。懇意にしていた教え子は長崎でしか手に入らないすめやお菓子を度々送り、筆子はそれを毎度「皆々大よるこびにて賞味致し候」「来客毎に少しずつ古郷の珍味をほこり候」と喜び、心を込めた礼状を認めている。筆子はどんな状況の中でも決して悲観せず、希望と喜びを見出す女性であったからこそ、数々の試練を乗り越え、功績を残し得たといえる。市内の大村小学校そばには筆子の胸像が建てられている。

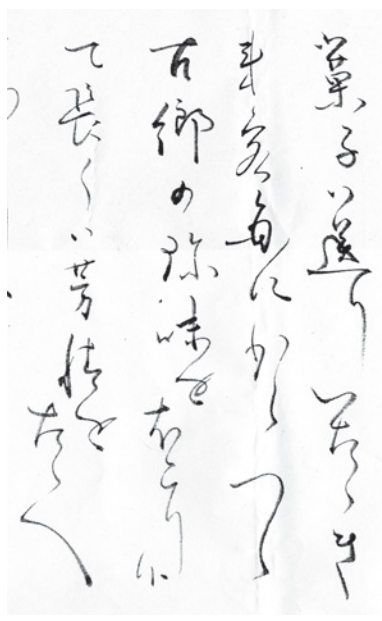


写真5-27 石井筆子直筆書簡 (個人蔵)



長岡 ながおか

半太郎 はんたろう

五教館出身、物理学者

慶応元年（一八六五）、大村藩士長岡治三郎の長男として久原（久原二丁目）に生まれる。明治七年（一八七四）、父



写真5-28 長岡半太郎  
(画像提供：国立科学博物館)

二十四年（一九四九）の日本人初のノーベル物理学賞誕生に貢献する。その他、貴族院勅選議員、学術振興会理事長、帝国学士院院長を務めた。昭和二十五年（一九五〇）没。

半太郎が物理学者として活躍を始める十九世紀末は、物理学では世界的発見が続き、原子構造の解明へ注目や期待が高まっていた。明治三十六年（一九〇三）、半太郎は、マックスウェルの土星の環の連動を解明した論文に着想を得て、それまでの「原子には電子が含まれ、陽電荷球の中にある」という考えから、「原子に含まれている電子群もまた、陽電荷球のまわりに土星の環のように運動して安定性を保っている」という新しい構造論を提唱する。それを形にしたのが「土星型原子模型」である。

半太郎以前にも同様の見解を講演で発表した研究者もいたが、専門的な研究論文として学術的な展開に成功したのは世界初であった。ヨーロッパでは、当時の物理学界の世界的なオピニオン・リーダーであるフランスのポアンカ

が政府の官吏となったことから一家で上京し、湯島小学校に入学。明治十五年（一八八二）、東京帝国大学理科物理学科（現在の東京大学理学部）に入学。同大学大学院に進学し、明治二十三年（一八九〇）、助教に就任。明治二十六年（一八九三）、ドイツに留学。明治二十九年（一八九六）、東京帝国大学教授に就任。昭和六年（一九三一）、大阪帝国大学（現在の大阪大学）初代総長に就任し、昭和九年（一九三四）六月まで務める。昭和十二年（一九三七）、第一回文化勲章を受章。昭和十四年（一九三九）、スウェーデンのノーベル賞委員会に湯川秀樹を推薦し、昭和



写真5-29 大阪帝国大学開学式当日にケンブリッジ大学名誉博士のガウンを着た半太郎（中央）  
(出典：立入 弘名誉教授アルバム 大阪大学編『大阪大学総長餘芳』(大阪大学出版会、2004年)から)

レが注目し、世界の中央の学会で紹介され、他にもイギリスの化学者ペリイも評価するなど国際的に注目を集めた。しかし、同時期に著名な物理学者であったイギリスのトムソンが別の原子模型を提唱したため支持は広がらず、また日本の物理学会や物理学者にとってもあまりに大胆な提案であったため積極的には支持されなかった。トムソンと半太郎の決定的な違いは電子が原子に含まれるのか否かであったが、後にトムソンの門下で原子物理学の父として知られるラザフォードによって明治四十四年（一九一一）に実験で証明された結果は、半太郎の主張がより解明に近かったことがわかった。ラザフォードとは自宅に招かれるほどの親交があり、大正十四年（一九二五）、功績を称えられ、ケンブリッジ大学から名誉学位を授与された。そのほかにも、大正十五年（一九二六）に示したコイルの自己・相互インダクタンスなどに関する長岡係数表は、現在も世界的に使用されている。

半太郎は科学というものは「実験装置よりも人物」によって進むと考え、科学者の育成にも力を注ぎ、大阪大学に「糟粕を嘗むる勿れ」（常に独創的であれ）との揮毫を残している。昭和四十五年（一九七〇）には月のクレーターの一つが「長岡」と名付けられたことから、半太郎が世界を舞台に活躍した物理学者であったといえる。市内の大村高等学校校史資料室には「楽水」の雅号で半太郎の書が残され、また久原二丁目の屋敷跡は市指定史跡となっている。



**福田 雅太郎**  
（一八六六〜一九三三）

**五教館出身、軍人**

慶応二年（一八六六）、大村藩士福田前延の長男として武部郷田ノ平（武部町）に生まれる。五教館、公立玖島小学校で学ぶ。明治十三年（一八八〇）に県立大村中学校の第一回生として入学。明治十六年（一八八三）に上京し、陸軍士官学校に当時最年少で合格する。明治二十三年（一八九〇）、陸軍大学校に進学。明治二十七年（一八九四）、日清



写真5-30 半太郎の自宅書斎

（画像提供：国立科学博物館）



写真5-31 福田雅太郎  
(大村市立史料館所蔵)

戦争に従軍し、第一師団副官、参謀本部で任務に就く。明治三十年（一八九七）、ドイツ留学。明治三十七年（一九〇四）、日露戦争に従軍し、第一軍の参謀を務める。大正十年（一九二一）、陸軍大将となる。台湾軍司令官、関東戒嚴司令官等を歴任。昭和七年（一九三二）没。墓は東京都の青山霊園と市内の小佐古にある。

雅太郎は大村出身の後進の育成のため、大村学寮と財団法人大村育英会の設立に奔走し、功績を残している。雅太郎が長崎県出身で唯一の陸軍大将まで出世したのは、母・マス子の教育によるところが大きい。雅

太郎は両親の晩年の子であり、父は一一歳の時に亡くなった。マス子は勤王三十七士同盟の一人である常井邦衛の叔母に当たり、生来勝気でしつかりとした女性であった。前延の死後に父親の代わりとして、いかに生活が困窮しようとも雅太郎を武士の子として育てるため、自ら訓育し、剣道を習わせ、五教館の流れを汲む玖島小学校に通わせた。しかし、進路を決める際、雅太郎が願っていたのは鹿島への遊学であった。「なぜ東京に行かないのか」と尋ねるマス子に雅太郎は高齢の母を案じる心情を口にした。すると「私のそばにいたことが必ずしも孝行ではない。」と諭し、「お前のためなら、どんな不自由でも忍びます」と雅太郎の上京を後押しした。士官となった後も陸軍大学校入学を勧め、卒業後には「私は更に雅太郎が洋行して帰るのを見たい」と希望を語る母であった。雅太郎の大成のために一身を捧げた母がいたからこそ、陸軍大将・福田雅太郎は誕生したといえる。

そうした母の教育を受けた雅太郎が協力を呼びかけ、建設さ



写真5-32 母・マス子  
(黒板勝美『福田大將傳』 福田大將傳刊行会、1937年から)







田川

大  
吉  
郎

(一八六九〜一九四七)

新聞記者、社会運動家、教育者、官僚、政治家



写真5-34 田川大吉郎

(明治学院歴史資料館提供)

行雄が東京市長になると東京市水道部長に就任。明治四十年(一九一五)明治学院理事長となり、大正十四年(一九二五)には明治学院第三代総理に就任。昭和十年(一九三五)、辞任。昭和十八年(一九四三)、長崎から上海に亡命。昭和二十二年(一九四七)帰国し、昭和二十三年(一九四八)没。

大吉郎は幅広い分野にわたって活躍した人物である。新聞記者としては、早くから尾崎行雄がその実力を認めており、大吉郎の記事を目にしたことで二人が出会うきっかけとなった。「私は甚く感服して、如何なる人であろうかと聞いて見たら、其人は今専門学校在学中の九州の学生で、矢野君に知られて居る人であるといふことであつた、如何にも其の文章と云ひ立論と云ひ立派であるから、面会したいと云つて紹介を求めた」ほどである。政治、経済、宗教、思想、教育、社会福祉、軍縮・平和などの幅広い内容の著作を残し、生涯、言論人であつた。

社会運動家としては、都新聞の紙面で普通選挙の実現を訴え、政界に進出すると議員としても選挙法の改正に奔走した。また、市川房枝が所属する婦選獲得期成同盟の活動を支援し、いち早く女性の参政権獲得にも関心を持ち、尽



良工事・水道拡張、電車の市有化等に大きな業績を残している。

また注目すべきは、戦争が長期化する日中両国の和平交渉の道を大吉郎が探っていたことである。長崎で中国語を学び、論語に親しんだ大吉郎は通訳官としても日清・日露戦争に従軍し、中国との関わりが深い。悪化する日中関係に胸を痛め、自ら中国各界の指導者らと対話を重ね、終戦までに日中間を前後一七回往復した。

和平交渉は中途で終わったが、「中国の人たちと心と心の通った付き合いをしなくてはならない。それは中国の人たちを敬い、敬われ、お互いに尊敬し合った親友のような付き合いをすることである」という言葉を残している。



浜田

彪

(一八七〇～一九三八)

大村中学校出身、技術者、経営者



写真5-37 浜田 彪  
(大村市立福重小学校所蔵)

明治三年(一八七〇)、福重村の初代村長一瀬信造の次男として生まれ

る。大村中学校を卒業後、東京都立蔵前工業高等学校に入学。明治二十四年(一八九一)に同校を卒業後、三菱合資会社に入社。長崎造船所の機械製図を担当する。同年、浜田家の養子となり、浜田姓を名乗る。明治三十一年(一八九八)、長崎市鮑の浦に電機工場が新設され、主任技師となる。同年、欧米の造船業・電気事業を視察し、翌年帰国。大正六年(一九一七)、長崎三菱造船所第六代所長に就任。大正九年(一九二〇)、三菱造船株式会社常務取締役就任し、大正十四年(一九二五)には会長に昇任。昭和七年(一九三二)、同社を退社。昭和十三年(一九三八)没。

彪は、長崎造船所の発展と郷土への貢献、人材育成に大きな功績を残している。当時日本の造船工業は外国に遅れをとっていたため、商船や軍艦の大半がイギリス等で建造されたものを購入していた。日本郵船株式会社の取締役であった莊田平五郎は、国内の現状を憂慮し造船工業の育成のために造船奨励法の制定に尽力する。莊田が長崎造船所

に持ちかけた国内初の約六〇〇トンの新船・常陸丸の建造は、「わが造船史上空前の大仕事」と言われ、長崎造船所がそれまでに起工した最大の貸客船・須磨丸の約四倍規模の大きさであった。建造に当たり、本社に「引き受け可」の返答をしたのが技師の塩田泰介と彪であった。二人は「近き将来に、かう云うことがあると期待し得られるものもないので、出来るかと答へ、最善を尽くすことにしよう」と決断を下した。常陸丸は、明治三十一年（一八九八）八月に完成し、日本が初めて建造した大型商船となった。常陸丸の建造によって長崎造船所は大きく飛躍し、彪の所長時代に、第一次世界大戦下の好況で生産は著しく伸び、従業員も一万八〇〇〇人を超えた。長崎造船所が飛躍する大きな決断に彪は関わっていたのである。

また、郷土と後進の人材のために多方面にわたって支援している。例を挙げれば明治四十五年（一九一三）に設立された長崎県立長崎図書館の史料収集に資金を援助し、後に貴重史料と和洋図書などを寄贈した。その一部は、現在でも同館に所蔵されている。昭和四年（一九二九）には福重村の学生のため、奨学資金として一万円を寄付した。野田郷（野田町）には、昭和五年（一九三〇）に野田農事改良実行組合の設立を援助するため七五〇円を、昭和八年（一九三三）には野田郷青年団に一〇〇円を寄付した。野田郷青年団はこの資金をもとに当時貴重であった楽器を購入し、野田楽隊を結成。野田楽隊は運動会や敬老会、赤似田堤かさ上げ工事落成時に演奏し、多くの人たちに喜ばれたという。また、同郷の友人の遺児で後に大村市長に就任する松本寅一には、アメリカ留学の資金を援助し、帰国後の国際フレンド会館の建設に至るまで親身に協力を惜しまなかった。彪の資金援助は、単に財力から発



写真5-38 常陸丸

(三菱重工業(株)長崎造船所提供)



写真5-40 朝永三十郎  
(大村市立史料館所蔵)



朝永三十郎(一八七二〜一九四〇)

私立大村中学校出身、哲学者・哲学史研究者

したのではなく、郷土への情熱から発したものである。それはアメリカに旅立ち  
松本寅一に送った言葉からうかがい知れる。  
「福重村から太平洋を越えて遠く米国に行くのだから君は郷里の名誉であり誇  
りだ。しかし帰国したら『洋行帰り』だと周囲の人、世間は君のことをチャホヤす  
るかもしれないが、決して調子に乗ってはいけない。留学の真価は帰国後に試さ  
れるのだから。留学中に、自分の生涯の目標を見つけて、帰国後は、留学中に学  
んだ知識と経験を少しでも社会に貢献できるように努力してもらいたい」。  
彪の人格は、「精緻な思考と強い信念の凜呼たる人ながら、後進には温かい高潔  
な人格者であった」と言われ、造船所内で開催されたポートルース大会では率先  
して漕ぎ、スポーツを好んだと伝わっている。現在、大村市立福重小学校や野田  
町公民館では写真と共に彪の功績が称えられ、顕彰されている。

明治四年(一八七二)、川棚村石木(東彼杵郡川棚町石木郷)の大村藩士  
朝永甚次郎の家に生まれる。小学校卒業後、私立大村中学校に進学し二  
年間学んだ後、向学の志を立てて上京。明治二十三年(一八九〇)、一九  
歳で第一高等中学校に入学。当時、教壇に立っていた内村鑑三の影響で  
イギリスの歴史家かつ評論家であるカーライルの作品に出会い、在学中  
に親しむ。研究を母校大村中学校の雑誌に投稿もしている。明治二十九  
年(一八九六)に東京帝国大学文科に入学後、哲学・哲学史を専攻。明治



写真5-39 野田楽隊 (個人蔵)



三十一年（一八九八）、京都・真宗大学の教授に就任。結婚し、二男二女に恵まれた。そのうち長男は後にノーベル物理学賞を受賞する朝永振一郎である。

明治四十年（一九〇七）、京都帝国大学の助教授に就任。明治四十二年（一九〇九）〜大正二年（一九一三）にかけて、哲学史研究の命を受けて欧州に留学。ドイツの哲学者ヴィンデルバントに感銘を受け、師事。大正二年同大学教授に昇任。文学博士となる。同大学には西田幾多郎（よしかた）がおり、生涯の友となる。昭和六年（一九三一）、京都帝国大学を定年退官し、名誉教授となる。同年大谷大学教授に就任、昭和十九（一九四四）まで在職。昭和二十六年（一九五二）没。

三十郎の代表的な著作には『近世に於ける「我」の自覚史』、『カントの平和論』がある。また『哲学綱要』『哲学辞典』といった日本最初の体系的基礎文献の刊行も功績の一つである。三十郎の功績を知る上で欠かせないのが、哲学・哲学史を専攻した動機である。カーライルの作品に触れたことが、大学での専攻を決めるきっかけとなったとの述懐があり、また後年の回顧の中では青年期に世相を嘆き、「大いに日本文化を高揚せしめて民族の優秀性を実現せんとの目的を以て遂に哲学を志望するに至った」とも伝わる。当時の欧化政策に代表される西洋化の中で、青年期の三十郎は日本が国際社会の中で西洋諸国と対等にわたりあえる方法を哲学の分野に希求したのである。

日露戦争の戦勝を祝賀し、凱旋門を馬場先門跡（東京都千代田区馬場先門）に建設する話が持ち上がった際に発表した論文では

凱旋門なるものは本来一時的のものである可き筈と思ふ。自国民に取ての凱旋記念は其戦争の対手国に取ては戦敗記念である。永久的の凱旋門を建て、対手国民に永く戦敗の記憶と印象とを新たに与ふる機会を与ふるは、人道の上より言ふも、利害の上より言ふも決して当を得たことでは無い。（中略）今西洋の風を真似て之を建つるのは独り西洋にのみ残存して居る蛮風を移植するものである。（中略）幸いにして今日までに出来たる凱旋門は皆な一時的のものである、最もよくて半永久的なもの位に過ぎぬ。即ち文字通りの意味における凱旋門である。既に凱旋が済んだ以上はさっぱりと之を打毀してしまつて其跡形をも残さぬ様に仕たい。（後略）

と論じ、西洋諸国と日本の文化の違いを指摘しながら、双方が属する国際社会という広い視野から建設に対する提言を行った。後に、凱旋門建設の話は立ち消えとなった。

右記の論文以降、三十郎は研究人生をかけて大きな二つの問いに取り組んでいる。一つめは、日本と日本人が抱える哲学的課題とは何かという問いである。日本という国の精神的土壌、その長所・短所を踏まえ、西洋哲学史を祖述しながら取り入れるべき哲学を模索した。そして、後年まとめあげたのが『近世に於ける「我」の自覚史』である。二つめは、国際社会の中で日

本と日本人が、他国の文化や学問を共有しながら共存できる世界のあり方とは何かという問いであった。三十郎が目したのはカントの平和思想であり、後に『近世に於ける「我」の自覚史』と関連づけ、『カントの平和論』を著している。一貫して三十郎が志向したのは、日本と日本人が国際社会で存在する道を哲学でどう切り拓くかであった。

後世伝えられる三十郎の人物は温厚、清廉、誠実であった。教え子で、文部大臣を務め獨協大学初代学長となった天野貞祐は、先生は「西洋の学問をされた自由主義者ですけれども武士の魂を持った日本人でした。」と回想している。現在、川棚町立石木小学校の校庭には朝永家顕彰之碑が立ち、三十郎の長男・振一郎が植樹した紅葉の木が大切に受け継がれている。また、市内松原の福田家には三十郎と交流のあった福田雄太郎に宛てた書簡・写真が残され、現在は市立史料館に収蔵されている。



**楠本 長三郎**（一八七二～一九四六）  
大村中学校出身、医学博士、大学経営者

明治四年（一八七二）、大村藩医楠本家四代、元正の次男として七ツ釜村（西海市西海町七ツ釜郷）に生まれる。明



写真5-41 学生時代の三十郎（左）（個人蔵）



写真5-42 楠本長三郎  
(長崎県立大村高等学校提供)

治六年（一八七三）、大村中学校に入学。明治二十九年（一八九六）、第一高等学校を卒業後、東京帝国大学医科大学（現在の東京大学医学部）に入学。大正四年（一九一五）、府立大阪医科大学教授に就任。大正十三年（一九二四）、同大学大学長を兼職。昭和六年（一九三一）の大阪帝国大学（現在の大阪大学）創立に尽力し、医学部部长に就任。昭和九年（一九三四）、第二代総長に就任。昭和十八年（一九四三）、退官。昭和二十一年（一九四六）没。

長三郎は、親切を第一とする診療で大阪を舞台に活躍した医者である。適切な診断と分け隔てなく多くの患者に献身したことから大阪の実業界、言論界、市民、各方面から信望が厚かった。大阪医科大学長就任後も、率先して患者の診断に当たり、学長としても経理事務の刷新に努め、特に力を注いだのが大阪帝国大学創設であった。昭和五年（一九三〇）には半年間欧米各国に大学制度の実情を視察し、帰国後は大阪府、市、財界、民間問わず自身の人脈を当たり、創設の協力を得るために奔走した。そして当時の総理大臣である浜口雄幸の理解を得て、昭和六年に大阪帝国大学が創設された。注目すべきは、大学創設費として寄付された大阪府からの総額一八五万円である。そのうち九七万円は、長三郎の経理事務の刷新によって得た病院収入残余金であった。大阪の財閥で長三郎の支援者であった伊藤忠兵衛は「大阪大学のある限り、楠本先生はその功労の第一級である」と語っており、その功績の大きさがうかがえる。

初代総長の人選と就任にも助力した。推薦された長岡半太郎は、再三の承諾要請にもかかわらず、総長就任を固辞していた。研究一筋である自身は適合しない上に性来そうした役職を好まないという理由からである。しかし、理学部の創設に尽力した反面、大学創設目前での停滞に危惧を抱いた。半太郎は長三郎を「彼は研究家といわんより経営者である。創立には持ってこいの適材だ。未来の総長には他に人はない。このさい半年間彼が手並みを見せると予の

廃業は可能である」と自身の早期退任を成し得る人物と見込んで、総長就任を承諾したという。半太郎と長三郎は親戚関係であり、同じ大村出身の親しい間柄でもあった。

半太郎の画策どおり、後に第二代総長に就任した長三郎は、微生物病研究所、財団法人大阪癌治療研究会、災害科学研究所、産業科学研究所の設立に貢献した。設立に伴う多額の寄付や募金などは長三郎に対する大阪の政・財界からの信頼の現れであり、それなくして実現は不可能であった。

長三郎の退官に当たって、昭和十八年「楠本前総長記念奨学会」が組織され、昭和二十年（一九四五）に「楠本博士記念奨学会」として正式に発足した。会の規程によって、大阪大学卒業生の各部首席に長三郎の名前を冠した「楠本賞」が毎年授与されている。受賞者の中には、アメリカ在住日本人原子力科学者である日引俊などがある。

現在、長三郎の生家跡には、楠本氏邸宅跡碑が建ち、碑文には「氏ハ生地ノ旧恩ヲ郷閭ニ酬ヒンガタメ、偶当郷奨学会ノ企アルニ際シ、資金トシテ金数千円外邸宅ヲ当郷ニ寄付セラル」とある。また大正十年（一九二二）には、金二〇〇〇円を奨学資金として、金一五〇〇円を電灯架設費用と付帯雑費として寄付している。母と郷土の人々の支えで医者となった長三郎は、大阪で活躍しながらも、郷土への思いを忘れずその発展に尽力した人物であった。



あらまき  
荒木

じゅっぱ  
十畝

（一八七二〜一九四四）

大村中学校出身、日本画家

明治五年（一八七二）、朝長兵蔵の次男として久原郷（久原二丁目）に生まれる。本名を悌次郎といい、幼少期から絵を好み、小学校卒業と同時に毛筆画を習う。大村中学校に入学後は、雅号を「琴湖」とし、水墨画を描き始める。



写真5-43 楠本賞

（大阪大学提供）



写真5-44 荒木十畝  
(大村市立史料館所蔵)

展」と帝国展覧会「帝展」に出品し、第二回文展以後、引き続き政府主催の美術展覧会の審査員を務めた。昭和十九年(一九四四)没。

明治二十六年(一八九三)から日本美術協会主催の展覧会に出品し、明治二十八年(一八九五)、「竹林遊鷄」が日本美術協会展一等褒状を受賞。同年、日本美術協会の会員となり、日本画家として本格的なスタートを切った。多数の入選作品を残しているが、セントルイス万国博覧会に海外出品し、昭和初期には中国やタイに渡って日本美術展覧会を開催するなど、日本美術の海外紹介にも尽力した。寛畝の死後は荒木派の画塾・読画会を主宰し多くの人材を輩出した東京画壇保守派の中心的人物の一人である。画家として前半生は写実性の高い花鳥画を多く描いたが、後半生は西洋画と東洋画の根本的な違いに目を向け、精神性の高い作風の作品を残している。

同窓で最も親しかった友人に黒板勝美がいる。明治二十五年(一八九二)、画家を志望し、上京。郷土の先輩である渡辺清を頼り、渡辺の同僚である野村素介の紹介で荒木寛畝かんぼの塾に入門。一年余りで頭角を現し、寛畝の後継者として江戸時代以来の日本画の名家である荒木家の養子となり、雅号を「十畝」と改める。明治二十六年(一八九三)、東京女子高等師範学校(現在のお茶の水女子大学)の嘱託となり、後に助教・教授に昇任。大正八年(一九一九)まで、美術教育に携わる。明治四十年(一九〇七)から文部省美術展覧会「文



写真5-45 十畝作「松鷹図」  
(大村市立史料館所蔵)



十畝の代表作の一つに「黄昏」がある。大正八年（一九一九）に文展の官制が廃止され、新たに帝国美術院（現在の日本芸術院）が設立された。同院長には森鷗外が就任し、第一回帝展が開催されるに当たって、十畝は世評に反し、審査委員から除外されてしまう。しかし、十畝が出品した「黄昏」は会場で圧倒的な好評を博した。絶賛の声と作品に触れた森院長は審査員に加えなかつた不明を深く詫びたという。以後第二回帝展からは森院長の熱心な招請で、審査員に選任された。また、「黄昏」は花鳥画を得意とした十畝が、それまでの伝統的な余白美の空間や装飾的な空間とは異なるリアルな空間を个性的に描いた作品である。この作品を機会に十畝は長年勤めた教職を辞し、日本画家として創作活動に専念している。

門人の一人である木本大果は伊豆に写生旅行に行った際、船で暴風雨に見舞われた。沈没してもおかしくない状況



写真5-46 「黄昏」

（一般財団法人野間文化財団）

下、「絵描きはこんな荒れている波の状態を見なければいかん」とデッキで荒れ狂う波をじつと観察する十畝に芸術家としての姿勢を感じたと語っている。十畝は徹底した自然観察に裏打ちされた画家であったといえる。十畝の生家跡は市内の上久原武家屋敷の中にあり、木碑が建てられている。



**黒板勝美**（一八七四～一九四六）

**私立大村中学校出身、日本史学者・文学博士**



写真5-47 黒板勝美  
(大村市立史料館所蔵)

進級できたのは英語力が生かされたものとされる。日本史学者の中では黒板は英語に秀でた学者であった。平成二十六年（二〇一四）東京大学英語英米文学研究室内の書棚から、黒板がハーンの講義を英語で筆記したノート**写真5-48**が発見され、平川祐弘（東京大学名誉教授・比較文学専攻）が確認した。明治二十六年（一八九三）第五高等学校を卒業、その後歴史学を志し東京帝国大学文科国史科（後の東京大学）に入学し、古文学を専攻。明治二十九年（一八九六）大学院に進学。その後、経済雑誌社に入り、田口卯吉（鼎軒）の下で『国史大系』校訂に従事。明治三十四年（一九〇一）東京帝国大学史料編纂官、翌年同文科大学講師。明治三十八年（一九〇五）同助教授となり、史料編纂官を兼務。「日本古文書様式論」により東京帝国大学から文学博士の学位を取得。明治四十一年～四十二年（一九〇八～一〇）、学

明治七年（一八四七）旧大村藩士黒板要平の長男として彼杵郡下波佐見村（東彼杵郡波佐見町田ノ頭郷）に生まれる。祖父は大村藩士で藩主の側近を務め、池田分（大村市諏訪）に住んでいたが、廃藩後、黒板家の私領地がある波佐見に移り住んだ。父は上波佐見村の村長などを務めた。明治二十三年（一八九〇）私立大村中学校を卒業、熊本の国立第五高等学校（熊本大学の前身）に進学した。当時、同校で英語を教えていたのが『怪談』などを著したギリシヤ人の日本研究家ラフカディオ・ハーン（小泉八雲）であり、黒板はハーンから英語を学び、後年東京大学進学後、若くして

術研究のため私費で欧米各国に出張。大正八年（一九一九）史料編纂官兼東京帝国大学教授となる。翌年史料編纂官を退任、東京帝国大学教授専任となる。昭和八年（一九三三）頃、大村藩史の編纂に精励する。翌年、日本古文化研究所を創設し、所長となる。翌年東京帝国大学教授を定年退官。同名誉教授。昭和十一年（一九三六）史跡調査の途次、群馬県高崎市において、脳溢血で倒れた。昭和二十一年（一九四六）没。享年七三歳。墓は、東京の池上本門寺の墓地にある。

黒板の業績の第一は日本史学研究の基礎に西洋の歴史学など数多くの手法を取り入れ、日本古文学の体系を樹立したことである。黒板勝美功績書（抄録）には「我が國古文学書ノ體系ヲ樹立シ、國史學研究ノ基礎ヲ確カナラシメシコトヲ以テ最モ大ナリトナス。」「日本古文学書ノ體系ヲ樹立セリ。」と記されることから分かる。それを応用して「正倉院文書」の調査を始め、東寺・金剛峯寺・醍醐寺などの秘庫を開いてその古文書の整理に努め、史料編纂掛の『大日本古文学』の編纂を主宰した。特に一〇万点を数える膨大な量の古文書・聖教を調査し保存の手立てを講ずることが喫緊の課題であることを説いて醍醐寺を動かし、本格的調査を開始した功績は今も高く評価されている。

第二は日本の歴史史料を書籍化する『国史大系』の校訂出版に従事し、日本史の基本史料を活字化したことである。これは田口卯吉の『国史大系』に次ぎ、昭和四年（一九二九）からは、『国史大系』の不足を補うため、黒板自身の編集による『新訂増補国

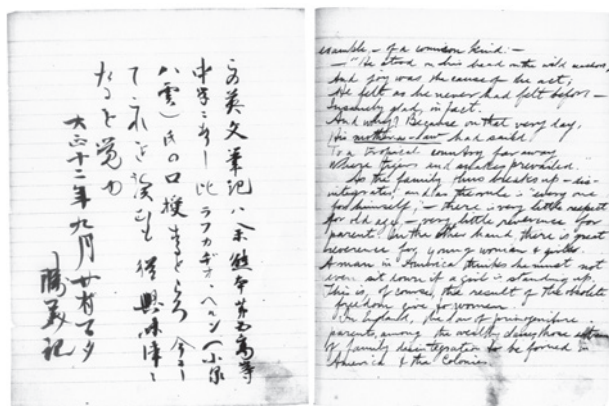


写真5-48 熊本五高生・黒板勝美のハーン授業ノート自筆原版 序(前書)と英文

【註】 平川祐弘編『ラフカディオ・ハーンの英語クラス Lafcadio Hearns English Class』—黒板勝美のノートから(弦書房、2014年) 26頁、150頁から。

史大系』の刊行を始めた。完成後、合計六六冊となった『国史大系』は、現在の歴史学研究の基本史料となった。

第三は国宝保存会、史蹟名勝天然記念物調査会、重要美術品等調査委員会などの委員として文化財の保存に努めたことである。特に史蹟保存の根本方針を定めた功績は大きい。古文書の保存だけではなく、様々な分野の歴史の普及や保存に積極的に取り組んだ。

また黒板は当時、世界共通語として注目を集めていたエスペラント語の日本普及に力を注いだことでも有名である。エスペラント語は、明治二十年（一八八七）に新たに発明された国際語で、黒板は日本エスペラント協会設立の中心人物である。世界の中での日本を見据えた黒板の考えを示している。



福田

清人

（一九〇四～一九九五）

大村中学校出身、児童文学作家



写真5-49 福田清人

（波佐見町教育委員会提供）

明治三十七年（一九〇四）、福田和一郎の長男として東彼杵郡波佐見町宿郷鹿山に生まれる。大正六年（一九一七）祖父・栄左衛門の熱心な勧めにより、大村中学校に入学。大正十二年（一九二三）、福岡高校に進学し、大正十五年（一九二六）、東京帝国大学文学部国文科に入学。卒業後、昭和四年（一九二九）、長谷川巳之吉が創業した第一書房に入社。昭和六年（一九三一）に退社後は、自身初の創作集『河童の巣』を刊行し新進作家としての地位を築く。一方で、『硯友社の文学運動』では、近代文学研究者としても脚光を浴びた。戦時中は日本文化報国会、大政翼賛会、日本小

国民文化協会等で文化活動に関わる。昭和二十五年（一九五〇）～五十二年（一九七七）の間に、実践女子大学、立教大学、立教女学院短期大学等の教壇に立つ。昭和三十年（一九五五）、日本児童文芸家協会の設立に関わり、第二代理事長を一〇年間務める。昭和三十二年（一九五七）、講談社の『少年少女日本歴史小説全集』企画で『天平の少年』を



執筆し、翌年、第五回産経児童出版文化賞を受賞。昭和四十年（一九六五）、『春の目玉』で国際アンデルセン賞国内賞を受賞。昭和四十一年（一九六六）、『秋の目玉』で第四回野間児童文芸賞を受賞。同年、『春の目玉』で国際アンデルセン賞優良賞を受賞。昭和五十年（一九七五）、日本児童文芸家協会会長に就任。平成七年（一九九五）没。

当初大人向けの小説を書いていた清人が児童文学を書くようになったきっかけは、戦時下の文化活動にある。子どもたちのためと必死で取り組んだにも関わらず、敗戦で無に帰した状況に清人は虚脱状態に陥った。しかしその中で、「カサカサにすさんだ同胞たちの心をあたためるやうなものを書きたい」と立ち上がり、自分の原点を見つめ、生み出した作品が児童文学であった。清人の作品にはそれまで一般的だった立身出世のための苦闘や貧困といったどこか暗い雰囲気ではなく、素朴な明るさやみずみずしい少年の心情などの描写が日本の児童文学界に新しい波を起こした。清人は、児童文学を書くのは「児童たちに楽しさのうちにその魂に美を点じ、夢や勇気などを植えつきたい願いからである」と語っている。

代表作である『春の目玉』『秋の目玉』『暁の目玉』のいわゆる「目玉三部作」は、清人の少年時代に基づいた自伝的小説で、『春の目玉』が医者之家に生まれた田口草夫少年の幼年時代から中学校に入学するまで、続く『秋の目玉』が生まれ故郷を離れて大村の親戚の家に下宿してから始まった中学校生活の一年生まで、最後の『暁の目玉』では中学二年生から高校進学までを描いている。作品名にもなっている「目玉」とは、草夫少年の目玉と故郷を離れる際に祖父が「つぎにきみが将来になにか希望をたてる。その希望がかなえられたとき



写真5-51 福田清人の代表作『春の目玉』『秋の目玉』『暁の目玉』  
(講談社)



写真5-50 野間児童文芸賞 賞牌  
(波佐見町教育委員会所蔵)



つぎの目玉をかきいれてくれたまえ」と託したたるまの絵に由来する。『春の目玉』が受賞した国際アンデルセン賞とは、世界中の児童文学の質の向上に影響を与える国際的な賞で、選考水準の高さから「小さなノーベル賞」と呼ばれている。その国内賞（日本国内の作品の中から選考で贈られる）と優良賞（海外に紹介したい児童文学作品に贈られる。現在のIBBYオナーリスト）を受賞している。また、『秋の目玉』が受賞した野間児童文芸賞は、財団法人野間文化財団が昭和三十八年（一九六三）から設けた賞で、受賞者の中には詩人の谷川俊太郎や「ぞうさん」など童謡の作詞で知られるまじみちおらがいる。

『秋の目玉』では、黒板勝美が歴史研究の権威者・黒金博士として講話に訪れる場面がある。「諸君は、できるだけ大きなこころざし、大きなゆめを将来にえがいておきたまえ。それはどんなに大きかろうとも、大きすぎるといふことはない」とのはげましのことばに、文学の志をほのかに抱いていた清人（草夫少年）は刺激を受けたという。児童文学以外に長崎県内の小学校、中学校、高等学校合わせて三一校の校歌の作詞も手がけており、大村市立図書館所蔵の『春の目玉』には、本人直筆のサインが確認できる。

### 参考文献

#### 【渡辺 清】

- 大村市立史料館所蔵 史料館史料「新撰土系録」 複写 渡辺氏系譜  
大村史談会編『九葉実録』第五冊（大村史談会 一九九七）  
山路彌吉編『臺山公事蹟』（田川誠作 一九二〇 大村芳子 一九八五復刻）  
日本歴史学会編『明治維新人名辞典』（吉川弘文館 一九九四）



写真5-52 国際アンデルセン賞国内賞 賞状  
（波佐見町教育委員会所蔵）

我部政男・広瀬順皓編『国立公文書館所蔵 勅奏任官履歴原書』下巻(柏書房 一九九五)  
史談会編『史談会速記録』第五十九輯(史談会 一九九七)

宮地佐一郎編『坂本龍馬全集』(光風社出版 一九七八)

霞会館華族家系大成編輯委員会編『平成新修旧華族家系大成』下巻(社団法人霞会館 一九九八)

大村市教育委員会編『大村の歴史』(大村市教育委員会 二〇〇三)

一番ヶ瀬康子・津曲裕次・河尾豊司編『無名の人 石井筆子』―近代を問う歴史に埋もれた女性の生涯(ドメス出版 二〇〇四)

#### 【渡辺 昇】

大村市立史料館所蔵 大村家史料「渡辺昇自伝」

大村市立史料館所蔵 史料館史料「新撰土系録」 複写 渡辺氏系譜

大村史談会編『九葉実録』第五冊(大村史談会 一九九七)

山路彌吉編『臺山公事蹟』(田川誠作 一九二〇 大村芳子 一九八五復刻)

日本歴史学会編『明治維新人名辞典』(吉川弘文館 一九九四)

我部政男・広瀬順皓編『国立公文書館所蔵 勅奏任官履歴原書』上巻―転免病死ノ部―(柏書房 一九九五)

佐々木隆「渡辺昇」(国史大辞典編集委員会編『国史大辞典』第十四巻 吉川弘文館 一九九三)

霞会館華族家系大成編輯委員会編『平成新修旧華族家系大成』下巻(社団法人霞会館 一九九八)

大村市教育委員会編『大村の歴史』(大村市教育委員会 二〇〇三)

会計検査院130年史編集事務局編『会計検査院百三十年史』(会計検査院 二〇一〇)

大日方純夫「維新政府の密偵たち」御庭番と警察のあいだ(歴史文化ライブラリー368)(吉川弘文館 二〇一三)

末松謙澄「修訂 防長回天史」第五編中 八(末松春彦 一九二一 マツノ書店 一九九一復刻)

慶応二年十二月二十八日付「渡邊昇宛木戸孝允書簡」(木戸公傳記編纂所編『木戸孝允文書』第二 日本史籍協會 一九三〇)

慶応二年十二月二十八日「(木戸より渡邊への書翰抄)」(末松謙澄「修訂 防長回天史」第五編下 九 末松春彦 一九二一 マツノ書店 一九九一復刻)

国吉 栄『幼稚園誕生の物語』「謀者」関信三とその時代(平凡社 二〇一一)

沼尻桂一郎(真亭逢多)編輯『鮮亭永濯画』「現今 英名百首」(原版人・力石安之助 翻刻人・大谷玄之助、近藤太郎 一八八二)

沼尻桂一郎編『現今 英名百首』(リプリント日本近代文学(オンデマンド版)30)(大学共同利用機関法人人間文化研究機構  
国文学研究資料館 平凡社 二〇〇五)

【楠本正隆】

大村市立史料館所蔵 史料館史料「新撰士系録」複写 楠本氏系譜

大村史談会編『九葉実録』第五冊(大村史談会 一九九七)

国立歴史民俗博物館所蔵 国指定重要文化財 明治十一年五月十三日付 大久保利通宛楠本正隆書簡

国立歴史民俗博物館編『大久保利通関係資料目録』(国立歴史民俗博物館資料目録「2」)(財団法人 歴史民俗博物館振興会  
二〇〇三)

尾崎行雄『近代快傑録』(千倉書房 一九三四)

日本歴史学会編『明治維新人名辞典』(吉川弘文館 一九九四)

我部政男・広瀬順皓編『国立公文書館所蔵 勅奏任官履歴原書』下巻(柏書房 一九九五)

鳥海 靖「楠本正隆」(国史大辞典編集委員会編『国史大辞典』第四巻 吉川弘文館 一九八四)

霞会館華族家系大成編輯委員会編『平成新修旧華族家系大成』上巻(社団法人霞会館 一九九七)

大村市教育委員会編『大村の歴史』(大村市教育委員会 二〇〇三)

大村市教育委員会編『大村市の文化財』改訂版(大村市教育委員会 二〇一一)

【長与専斎】

伴 忠康『適塾と長与専斎』(創元社 一九八七)

村上陽一郎編『日本の科学者101』(新書館 二〇一〇)

松井保男『人物史の魅力』近代史の中の大村人(箕箒文庫 二〇〇五)

外山幹夫『医療福祉の祖長与専斎』(思文閣出版 二〇〇二)

畔柳昭雄『海水浴と日本人』(中央公論新社 二〇一〇)

石川幹明『福沢諭吉傳』第二巻(岩波書店 一九三三)

深瀬泰旦『長与専斎』(国史大辞典編集委員会編『国史大辞典』第十巻 吉川弘文館 一九八九)

大村市教育委員会編『大村の歴史』(大村市教育委員会 二〇〇三)

【長岡安平】

長岡安平顕彰事業実行委員会編『シリーズ・実学の森 祖庭長岡安平―わが国近代公園の先駆者―』(財団法人東京農業大学出版会 二〇〇〇)

長岡安平顕彰事業実行委員会編『祖庭 長岡安平の近代公園における功績』(長岡安平顕彰事業実行委員会 一九九九)

東京都公文書館所蔵国指定重要文化財『第三大区従廻町集町至永田町卷丁目同所式丁目水帳扱所』

藤野 保編『大村郷村記』第三卷(国書刊行会 一九八二)

津田礼子「長岡安平の公園デザインの特質」(活水女子大学健康生活学部・生活学科編『活水論文集』第46集 活水女子大学 二〇〇三)

浦崎真一「長岡安平の手記にみる公園設計の旅程に関する研究」(公益社団法人日本造園学会編『ランドスケープ研究』76 公益社団法人日本造園学会 二〇一三)

井上 清『祖庭 長岡安平翁造庭遺稿』(文化生活研究会 一九二六)

【福田寅作】

松原住民センター10周年記念実行委員会「ふるさと松原記念誌」(松原住民センター10周年記念実行委員会 一九八九)

東彼杵郡教育会編『長崎県東彼杵郡誌』(名著出版 一九七四)

長崎県教育会編『長崎県人物伝』(臨川書店 一九七三)

福田家史料「明治廿八年 福田寅作 履歴書 事跡上申」

長崎県教育会編『長崎県教育史』上巻(長崎県教育会 一九四二)

【熊野雄七】

鷺山弟三郎『明治学院五十年史』(明治学院 一九二七)

学校法人明治学院編『明治学院百年史』(学校法人明治学院 一九七七)

明治学院百五十年史編集委員会編『明治学院百五十年史』(明治学院百五十年史編集委員会 二〇一三)

秋山繁雄『明治人物拾遺物語 キリスト教の一系譜』(新教出版社 一九八二)

【瀬勇三郎】

大村市教育委員会編『大村の歴史』(大村市教育委員会 二〇〇三)

猪狩又蔵編『瀨勇二郎翁』(猪狩又蔵 一九三三)

芸備日日新聞社編『芸備日日新聞』明治四十一年三月二日 一面記事

【南 鷹次郎】

南鷹次郎先生伝記編纂委員会編『南鷹次郎』(南鷹次郎先生伝記編纂委員会 一九五八)

北海道総務部文書課編『開拓につくした人びと』文化の黎明 上(北海道 一九六七)

北海道大学編『北大百年史』通説(ぎょうせい 一九八二)

恵迪寮同窓会事務局編『南鷹次郎第2代総長揮毫の扁額「自彊不息」、南鷹次郎第2代総長揮毫の扁額「知徳併進」

(恵迪寮同窓会webページhttp://www.kateki-ob.jp/asset/hengaku.html か⑤)平成二十七年八月閲覧

大村市教育委員会編『大村の歴史』(大村市教育委員会 二〇〇三)

【横山寅一郎】

長崎市史編さん委員会編『新長崎市史』第三巻近代編(長崎市 二〇一四)

長崎市立博物館編『長崎学ハンドブックⅢ 長崎の史跡(歌碑・句碑・記念碑)』(長崎市立博物館 二〇〇四)

大村史談会編『大村史話』下巻(大村史談会 一九七四)

大村市教育委員会編『大村の歴史』(大村市教育委員会 二〇〇三)

『大村湾真珠株式会社』の歴史』(大村史談会編『大村史話』第五十六号 大村史談会 二〇〇五)

【石井筆子】

大村市・石井筆子顕彰事業実行委員会編『近代を拓いた女性―いばら路を知りてささげし 石井筆子の生涯』(大村市・石井筆子顕彰事業実行委員会 二〇〇二)

子顕彰事業実行委員会 二〇〇二)

河尾豊司「知的障害児の教育・福祉と石井筆子―チャペルと幽谷の姫百合」(大村市・石井筆子顕彰事業実行委員会編『近代を拓いた女性―いばら路を知りてささげし 石井筆子の生涯』大村市・石井筆子顕彰事業実行委員会 二〇〇二)

一番ヶ瀬康子ほか編『無名の人 石井筆子―近代を問ひ歴史に埋もれた女性の生涯(ドメス出版 二〇〇四)

大村市教育委員会編『大村の歴史』(大村市教育委員会 二〇〇三)

長島要一『明治の国際人・石井筆子』デンマーク女性ヨハンネ・ミュンターとの交流(新評論 二〇一四)

個人所蔵 石井筆子書簡

【長岡半太郎】



- 板倉聖宣ほか『長岡半太郎伝』(朝日新聞社 一九七三)  
大村市教育委員会編『大村の歴史』(大村市教育委員会 二〇〇三)  
大村史談会編『大村史話』下巻(大村史談会 一九七四)  
大村市教育委員会編『大村市の文化財』(大村市教育委員会 一九九〇)  
【福田雅太郎】

- 大村市教育委員会編『大村の歴史』(大村市教育委員会 二〇〇三)  
黒板勝美『福田大將傳』(福田大將傳刊行会 一九三七)  
福田清人ほか編『大村純毅伝』(大村純毅伝刊行会 一九七六)  
大村史談会編『大村史話』下巻(大村史談会 一九七四)  
中野区企画部『広報課編』中野の戦災記録写真真集(中野区 一九八五)  
株式会社住宅協会編『東京都全住宅案内図帳』(中野区)(株式会社住宅協会 一九五八)  
都市製図社作成『中野区全域図』(都市製図社 一九三三)  
株式会社ゼンリン作成『ゼンリン住宅地図』(東京都中野区)(株式会社ゼンリン 二〇一四)

【田川大吉郎】

- 松田宏一郎・五百旗頭薫編『自由主義の政治家と政治思想』歴史のなかの日本政治1(中央公論社 二〇一四)  
遠藤興一「田川大吉郎が見た戦間期ヨーロッパの国際情勢」(明治学院大学社会学会編『明治学院大学社会学・社会福祉学研究』137 明治学院大学社会学会 二〇一三)  
遠藤興一「中国政策に関する発言と行動の記録―戦時体制下における田川大吉郎の闘い―」(明治学院大学社会学会編『明治学院大学社会学・社会福祉学研究』139 明治学院大学社会学会 二〇一三)  
尾崎行雄『学堂回顧録』(実業之日本社 一九一三)  
楠精一郎『大政翼賛会に抗した40人』(自民党源流の代議士たち(朝日新聞社 二〇〇六))  
土方正巳『都新聞史』(日本図書センター 一九九一)  
明治学院人物列伝研究会『明治学院人物列伝』近代日本のもう一つの道(新教出版社 一九九八)  
遠藤興一「執筆活動からみた田川大吉郎」(明治学院大学社会学部付属研究所編『研究所年報』37 明治学院大学社会学部付属研究所 二〇〇七)

遠藤興一『田川大吉郎とその時代』(新教出版社 二〇〇四)

遠藤興一『シリーズ福祉に生きる4 田川大吉郎』(大空社 一九九八)

田川大吉郎「何を以て支那人の心を収むるか」(『経済情報』 一九三八)

【浜田 彪】

松本 晃『国際交流物語』父・松本寅一の生涯(丸善書店出版サービスセンター 二〇〇三)

三菱造船株式会社社長崎造船所職工課編『三菱長崎造船所』(一)『三菱造船株式会社社長崎造船所職工課 一九二八』

西日本重工業長崎造船所庶務課編『三菱長崎造船所史 続編』(西日本重工業長崎造船所庶務課 一九五二)

宿利重一『莊田平五郎』(宿利重一 一九三二)

上野盛夫「福重小学校と野田公民館にある浜田彪氏の写真と略歴」(二〇一四年六月二十五日作成資料)

福重ホームページ(歴史・伝統・観光・写真・イベントなどの情報発信) (<http://fukushige.info/fukushige-primary-school/page.html>)「福重(野田郷)生まれの浜田彪さんについて」平成二十七年八月閲覧

三菱重工業株式会社長崎造船所「長船ニュース」(KK岩永印刷 一九八四)

塩田泰介(口述)『自叙傳』塩田泰介氏自叙伝(出版社不明 一九三八)

【朝永三十郎】

芝崎厚士「朝永三十郎の国際関係認識―近代日本における(自我・国家・国際関係)の原的形成―」(一般財団法人日本国際政治学会編『国際政治』第156号 一般財団法人日本国際政治学会 二〇〇九所収 「国際政治研究の先駆」 6)

山本伸裕『清沢満之と日本近現代史思想』自力の呪縛から他力思想へ(明石書店 二〇一四)

川棚町教育委員会編『川棚町郷土誌』(川棚町 二〇〇二)

湯川・朝永生誕百年企画展委員会編集、佐藤文隆監修『素粒子の世界を拓く』湯川秀樹・朝永振一郎の人とその時代(京都大学学術出版会 二〇〇六)

朝永三十郎「凱旋門は一時のたる可し」(『西倫理会編』『西倫理会倫理講演集』第49号 大日本図書 一九〇六)

玉川大学内朝永先生の思い出編纂会編『朝永先生の思い出』(玉川大学 一九五七)

【楠本長三郎】

梅溪 昇「第二代総長 楠本長三郎」(大阪大学編『大阪大学歴史総長餘芳』 大阪大学出版会 二〇〇四)

渡辺 涉「楠本長三郎」(大村史談会編『大村史話』下巻 大村史談会 一九七四)

【荒木十畝】

大村市教育委員会編『大村の歴史』(大村市教育委員会 二〇〇三)

根崎光男編『荒木十畝とその一門』展図録(練馬区立美術館 一九八九)

『荒木十畝先生小伝』(複写)

富山秀男『荒木十畝』(国史大辞典編集委員会編『国史大辞典』第一卷 吉川弘文館 一九七九)

【黒板勝美】

黒板勝美先生生誕百年記念會編『黒板勝美先生遺文』(吉川弘文館 一九七四)

坂本太郎『黒板勝美』(国史大辞典編集委員会編『国史大辞典』第四卷 吉川弘文館 一九八四)

『黒板勝美博士年譜・著作目録』(財團法人古代學協會編『古代文化』第49号 第3号財團法人 古代學協會 一九九七)

『黒板勝美』(日本歴史学会編『日本史研究者辞典』吉川弘文館 一九九九)

大村市教育委員会編『大村の歴史』(大村市教育委員会 二〇〇三)

廣木 尚『黒板勝美の通史叙述—アカデミズム史学による卓越化の技法と〈国民史〉—』(日本史研究会編『日本史研究』第六二

四号 日本史研究会 二〇一四)

醍醐寺文化財研究所編『醍醐寺文化財調査百年誌』醍醐寺文書聖教「国宝指定への歩み(勉強出版 二〇一三)

平川祐弘編『フカディオ・ハーンの英語クラス』「afcadio Hears English Class」—黒板勝美のノートから(弦書房 二

〇一四)

黒板伸夫・永井路子編『黒板勝美の思い出と私たちの歴史探究』(吉川弘文館 二〇一五)

【福田清人】

津川正四『福田清人と「文芸広場」』(宮本企画 一九九〇)

板垣 信『福田清人』かたりべ叢書10(宮本企画 一九八六)

福田清人『春の目玉』(講談社 一九七六)

福田清人『秋の目玉』(講談社 一九八二)

福田清人『暁の目玉』(講談社 一九六八)

日本児童文芸協会ホームページ(<http://www.jidoubungei.jp/>)平成二十七年二月閲覧

